



# 戴国カレンダー

本表

作成者：ほしなみ

作成日：2021年9月11日



# 戴国カレンダー

作成者：ほしなみ (@hoshinami629)

2021/9/12

元号	年・置閏月	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所(新潮版)	備考
和元	22年	1月	春			宰輔失道、驕王崩御 泰果結実。五山に蝕			
	30年 章首 (閏10)					朽椈、この頃土匪として独立	八章4節	白銀② P.113	閏10月の次の11月の中気である冬至は必ず月初(朔の日)に来る。朔旦冬至
	31年								
	32年	12月	冬	小寒 7~9日 大寒 22~24日					
	33年 (閏6)	1月	春	立春 10~12日 雨水 25~27日	大寒次候 鶯鳥厲疾 大寒末候 水沢腹堅 立春初候 東風解凍 立春次候 蟄虫始振 立春末候 魚上氷 雨水初候 獺祭魚	泰麒蓬山に帰還、黄旗掲揚	風海 『戴史午書』 白銀二章1節	風海 P.378 白銀① P.54	左記の通り驕宗即位の年の記述が二通り存在する。この表では『白銀の墟 玄の月』の記述を採用する。
		2月	春	啓蟄 10~12日 春分 25~27日	雨水次候 鴻雁来 雨水末候 草木萌動 啓蟄初候 桃始華 啓蟄次候 倉庚鳴 啓蟄末候 鷹化為鳩 春分初候 玄鳥至	下旬 令乾門開門			
		3月	春	清明 13~15日 穀雨 28~30日	春分次候 雷乃発声 春分末候 始雷 清明初候 桐始華 清明次候 田鼠化為鴽 清明末候 虹始見 穀雨初候 萍始生	下旬? 翻孫、泰麒を生け捕りにしようとする	四章3節	風海 P.109	
		4月	夏	立夏 13~15日 小満 28~30日	穀雨次候 鳴鳩抃其羽 穀雨末候 戴勝降于桑 立夏初候 蟪蛄鳴 立夏次候 蚯蚓出 立夏末候 王瓜生 小満初候 苦菜秀				
		5月	夏	芒種 13~15日 夏至 28~30日	小満次候 靡草死 小満末候 小暑至 芒種初候 螳螂生 芒種次候 鵙始鳴 芒種末候 反舌無声 夏至初候 鹿角解	上旬~中旬 景麒、蓬山来訪 下旬 令坤門開門。驕宗・李斎、黄海に入る。 景麒、慶国へ帰る			
		6月	夏	小暑 15・16日 大暑 29・30日	夏至次候 蟪蛄鳴 夏至末候 半夏生 小暑初候 温風至 小暑次候 蟋蟀居壁 小暑末候 鷹乃學習 大暑初候 腐草為螢	下旬 蓬山に昇山者来訪。泰麒、李斎や驕宗と知り合う	七章1節	風海 P.194	夏至を過ぎて1ヶ月経たない頃に、昇山者が到着し始めている。夏至から1ヶ月経過未済で甫渡宮開扉、その2日後に李斎に、更にその数日後(3、4日後?)に驕宗と知り合う。驕宗と知り合った日が概ね大暑頃か。
	閏6月	秋	立秋 15・16日	大暑次候 土潤溽暑 大暑末候 大雨時行 立秋初候 涼風至 立秋次候 白露降 立秋末候 寒蟬鳴	中旬 甫渡宮閉扉、傲濫を折伏 中旬~下旬 泰麒、驕宗に叩頭 下旬 李斎下山。泰麒と驕宗、天勅を受け戴へ移る	風海 八章3節・ 十章1節・ 十一章1節 白銀二章1節	白銀① P.54 風海 P.236 同P.289 同P.316	甫渡宮閉扉が概ね立秋頃と見ると、折伏は立秋の1日後。李斎への見舞いは折伏の数日後で、その夜に転変・叩頭。驕宗・泰麒が吉日を待つ間に李斎が下山。	
	7月	秋	処暑 1日 白露 16日	処暑初候 鷹乃祭鳥 処暑次候 天地始肅 処暑末候 禾乃登 白露初候 鴻雁来 白露次候 玄鳥帰 白露末候 羣鳥養羞	上旬~中旬? 景麒、戴を来訪	十二章4節	風海 P.349	景麒の発言から、秋が来ていると考える。夏ならば「涼しい」と言うのではないかと想像。	

元号	年・置閏月	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所 (新潮版)	備考
弘始	1年	8月	秋	秋分 1～3日 寒露 16～18日	秋分初候 雷乃収声 秋分次候 蟄虫环戸 秋分末候 水始涸 寒露初候 鴻雁来賓 寒露次候 雀入大水為蛤 寒露末候 菊有黄華	上旬 令巽門開門。驍宗の随従・李斎が黄海を出る 中旬？ 驍宗の随従・李斎、戴へ帰国する 下旬？ 驍宗、即位礼を執り行う	エビローグ	風海 P.372	令巽門は巧に隣接する。巧から戴まで陸路とあるが、騎獣で雲海の下に行くという意味であろう。泰麒が連へ赴いた際の「空行」に近い進み方と考えるならば、10～12日程度の道程か？
		9月	秋	霜降 1～3日 立冬 16～18日	霜降初候 豺乃祭獸 霜降次候 草木黄落 霜降末候 蟄虫咸俯 立冬初候 水始氷 立冬次候 地始凍 立冬末候 雉入大水為蜃				
		10月	冬	小雪 4～6日 大雪 19～21日	小雪初候 虹藏不見 小雪次候 天氣上騰地氣下降 大雪初候 鶡鴒不鳴 大雪次候 虎始交	上旬？ 李斎、瑞州中軍將軍を拜命。鴻基に居を移す	一章4節	黄昏 P.41 同P.42	北国の初冬、また北国で降雪の開始ならば、暦よりもやや先行させて9月下旬と考えても良いかもしれない。
		11月	冬	冬至 4～6日 小寒 19～21日	大雪末候 荔挺出 冬至初候 蚯蚓結 冬至次候 麋角解 冬至末候 水泉動 小寒初候 雁北郷 小寒次候 鶡始巢	上旬 郊祀を行う 上旬～中旬 冬狩開始の予告 中旬～下旬 泰麒、連へ出立。冬狩開始	二章5節	黄昏 P.118	
	12月	冬	大寒 4～6日 立春 19～21日	小寒末候 雉始雊 大寒初候 鶡始乳 大寒次候 鶡烏厲疾 大寒末候 水沢腹堅 立春初候 東風解凍 立春次候 蟄虫始振	上旬～中旬 泰麒、連へ到着 中旬 泰麒、連を出立。この頃、前文州侯更迭？花影の心労極まる？ 下旬 文州南部古伯、土匪に占拠される。州師動く。	華音「冬寒」	華音 P.26 華音 P.52	雨涼宮滞在が三日＋重嶺到着日で、重嶺逗留が計4日。 往路は戴を出るのに一昼夜（＝1日）＋戴柳間の虚海を超えるのに一昼夜（＝1日）、範漣間の虚海を超えるのに一昼夜（＝1日）、柳・恭・範それぞれの国で4日ずつかかっているとすると、計15日。 復路もまた15日と考えると、往復＋重嶺逗留で合計34日。	
	2年	1月	春	雨水 7～9日 啓蟄 22～24日	立春末候 魚上氷 雨水初候 獺祭魚 雨水次候 鴻雁来 雨水末候 草木萌動 啓蟄初候 桃始華 啓蟄次候 倉庚鳴	上旬 泰麒、戴へ帰国 上旬 白圭宮に「文州に騒乱」の報が伝わる。 驍宗は即座に派兵を決定。翌日～3日後に英章軍出発 中旬～下旬 英章、琳宇に到着	白銀二章1節・二章4節・三章6節	白銀① P.56 同P.141 同P.170 同P.144	白銀①の古伯占拠に関する二つの記述が微妙にずれている。阿選が国外にいる時に乱が勃発したという情報なども総合して、年末に古伯が占拠され、年を跨いでそれが国へ伝わったと解釈した。
		2月	春	春分 7～9日 清明 22～24日	啓蟄末候 鷹化為鳩 春分初候 玄鳥至 春分次候 雷乃発声 春分末候 始雷 清明初候 桐始華 清明次候 田鼠化為鴽	上旬？ 古伯の近隣三箇所で土匪の暴動が発生 上旬～中旬 英章軍、古伯を解放。暴動長引く。 中旬 霜元軍と驍宗、鴻基を出立 下旬 雪が緩み始める	黄昏二章3節 白銀三章4節	白銀① P.148 黄昏 P.98	

元号	年・ 置閏月	月	季節	二十四 節気	七十二候	出来事	参照章 ・節	参照箇所 (新潮版)	備考			
弘 始	2年	3月	春	穀雨 7～9日 立夏 22～24日	清明末候 虹始見 穀雨初候 萍始生 穀雨次候 鳴鳩抃其羽 穀雨末候 戴勝降于桑 立夏初候 蟪蛄鳴 立夏次候 蚯蚓出	<p><u>上旬</u> 霜元軍と驍宗、また驍宗の率いる阿選軍二師、琳宇に到着。雪が融け始める</p> <p><u>上旬～中旬</u> 琳宇到着から3日後、驍宗は霜元に指揮官1人と手勢15人の貸し出しを求める</p> <p><u>中旬①</u> 琳宇到着から4日後、俐珪軍急襲を受ける。苦戦の報を英章が驍宗に送ったところ、失踪を確認。翌日計都のみ帰還</p> <p><u>中旬①</u> 宮城において鳴蝕あり、甚大な被害。宰輔失踪。夜、阿選は二声宮の白雉を地中に籠め、雉の足を切る。その場にいた官吏を殺害</p> <p><u>中旬②</u> 計都、陣へ帰還。芭墨、文州へ宰輔失踪と霜元の召喚の青鳥を出す。阿選、白雉の足を所持する</p> <p><u>中旬～下旬</u> 白雉が末声を鳴いたと文州に連絡が来る。霜元、驍宗失踪の報告の為、側近と共に空行で鴻基へ戻る。阿選軍、品堅に率いられ陸路で鴻基へ出発</p>	<p>黄昏三章 4節～6節・ 『戴史作書』 白銀三章5節</p>	<p>黄昏 P.469 白銀① P.162 黄昏 P.210 同P.194 同P.195</p>	<p>驍宗・秦麟の失踪日を某日とする。</p> <p>文州：某前日に驍宗は霜元から精鋭15人を借り受ける。某翌日に計都帰還、その日に霜元が兵卒貸し出しを英章らに打ち明ける。某日から2、3日後に芭墨からの青鳥届く。</p> <p>鴻基：某翌日に霜元から驍宗失踪の青鳥届く。 文州からの青鳥も1日後には鴻基へ届いているところから、芭墨の青鳥も1日後には霜元の許へ届いていると思われる。白雉末声の報がいつ文州に届いたかは不明瞭。青鳥で送ったのであれば、芭墨からの連絡の1日後になるか。州官經由であればそれより1、2日遅い可能性もある。霜元は鴻基への出立直前に末声の報を聞いたか。</p>			
					4月	夏	小満 10～12日 芒種 25～27日	立夏末候 王瓜生 小満初候 苦菜秀 小満次候 靡草死 小満末候 小暑至 芒種初候 螳螂生	<p><u>上旬</u> 霜元、空行で側近と共に鴻基に到着</p> <p><u>上旬～中旬</u> 品堅率いる阿選軍、鴻基に到着。霜元、文州へ戻る？</p> <p><u>中旬?</u> 臥信軍、鴻基を出発</p> <p><u>下旬?</u> 臥信軍、文州に到着</p>	<p>三章6節</p>	<p>白銀① P.172</p>	<p>臥信軍の文州投入と阿選軍の鴻基帰還は入れ違いであろうが、霜元の鴻基-文州の行き来との前後関係は不明。霜元の鴻基到着よりも臥信の鴻基出立がやや後か？ 芭墨が霜元の到着まで10日はかかると発言しているが、これは空行そのものに10日かかるというよりも、青鳥が届くの1日、準備に2、3日かかり、空行が6、7日程度という計算か？雪の中の行軍で文州まで半月、雪が融けてからの承州への進軍が半月であるため、雪のない季節の場合は鴻基～琳宇は半月よりも短い日数（12、3日程度？）がかかると考えられる。空行だとちょうどその半分程度の日数となるか。</p>
								5月	夏	夏至 10～12日 小暑 25～27日	芒種次候 鵙始鳴* 芒種末候 反舌無声 夏至初候 鹿角解 夏至次候 蜩始鳴 夏至末候 半夏生 小暑初候 温風至	<p><u>下旬</u> 文州の土匪の乱、一応の平定を見る。承州辺境に乱あり。</p> <p><u>下旬</u> 李斎、承州へ出発。鴻基見納め。その2日前、李斎と花影は阿選を偽王ではないかと語らう。霜元に軍の半数を率いて承州の李斎を支援せよとの命令あり</p>

元号	年・置閏月	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所(新潮版)	備考			
弘始	2年	6月	夏	大暑 10~12日 立秋 25~27日	小暑次候 蟋蟀居壁* 小暑末候 鷹乃学習 大暑初候 腐草為螢 大暑次候 土潤溽暑 大暑末候 大雨時行 立秋初候 涼風至	<p>上旬~中旬 臥信に帰還命令。軍の半数を文州に残し、半数を率いて鴻基へ戻るよう指示あり。霜元、出発間近？</p> <p>上旬~中旬 李斎、承州で二声氏を保護。文州出発直前の霜元に青鳥を、鴻基の芭墨に側近に持たせた密書を送る。李斎側近、道中で阿選軍に捕縛されるか</p> <p>上旬~中旬 霜元、文州出発直前に李斎からの青鳥を受け取る？翌日~数日後、鴻基から「李斎謀反」の報が届く。霜元・英章に李斎討伐の命令下る</p> <p>上旬~中旬？ 英章軍・霜元軍の半数・臥信軍の半数、文州にて離散。</p> <p>中旬~下旬 二声氏保護から10日後、李斎の許に空行師来る。李斎、捕縛されるも鴻基への移動中に逃亡</p> <p>中旬~下旬 霜元と半軍、承州で離散</p> <p>下旬 臥信と半軍も、鴻基入城後一両日中に離散</p>	黄昏三章6節 白銀三章6節	黄昏 P.213 白銀① P.173 同P.174	<p>李斎は二声氏を保護したその日に密書を認めたと読める。密書を預かった側近は空行したと見るのが妥当か。</p> <p>瑞州-承州の州境から数日の地点を出発して鴻基へ行く場合の日数は、霜元の文州-鴻基移動と同じ6、7日程度として試算。</p> <p>霜元へ送った青鳥は次の日には届いたとして扱う。また、李斎の側近は鴻基への道中で捕縛されたと考える。というのも、芭墨が李斎からの密書を受け取っていた場合、李斎の謀反は阿選に露見しなかった筈であり、李斎謀反と聞いた芭墨が異を唱える、という順序にもならなかった筈だからである。側近と密書が道中で阿選の手に落ちた為に、芭墨をも陥れる事が可能になったと見るべきだろう。</p>			
									<p>承州の園糸の里、承州州宰を匿った廉で焼亡</p> <p>回生の父、妖魔に襲われる。</p>	白銀一章1節・二章4節	白銀① P.13 白銀① P.100	
元号	年	弘始	5年									
赤楽	1年	2年	7年	10月	冬 小雪 10~12日 大雪 25~27日							
	3年	8年	11月	冬	<p>冬至 10~12日 小寒 25~27日</p>	<p>大雪次候 虎始交 大雪末候 荔挺出 冬至初候 蚯蚓結 冬至次候 麋角解 冬至末候 水泉動 小寒初候 雁北郷</p>	<p>この頃園糸の娘、馬州で死亡。園糸、項梁と出会う</p> <p>この頃、藍州で李斎と花影、再会する？</p>	白銀一章1節 黄昏一章6節	白銀① P.16 黄昏 P.69	<p>李斎が10月小雪の頃に瑞州中軍將軍を拜命した際は、山野に雪が積もり始めた程度だった。市街地に雪が降り積もり、凍っているのであればそれよりも一月程度先の時期と考えるのが順当か。</p>		
					12月	冬	<p>大寒 10~12日 立春 25~27日</p>	<p>小寒次候 鶺鴒始巢 小寒末候 雉始雊 大寒初候 鶉始乳 大寒次候 鶯鳥厲疾 大寒末候 水沢腹堅 立春初候 東風解凍</p>				
							1月	春	<p>雨水 10~12日 啓蟄 25~27日</p>	<p>立春次候 蟄虫始振 立春末候 魚上水 雨水初候 獺祭魚 雨水次候 鴻雁来 雨水末候 草木萌動 啓蟄初候 桃始華</p>		
2月	春	<p>春分 10~12日 清明 25~27日</p>	<p>啓蟄次候 倉庚鳴 啓蟄末候 鷹化為鳩 春分初候 玄鳥至 春分次候 雷乃発声 春分末候 始雷 清明初候 桐始華</p>									

元号	年	元号	年	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所(新潮版)	備考
赤楽	3年	弘始	8年	3月	春	穀雨 13~15日 立夏 28~30日	清明次候 田鼠化為鴽 清明末候 虹始見 穀雨初候 萍始生 穀雨次候 鳴鳩抃其羽 穀雨末候 戴勝降于桑 立夏初候 蟬鳴鳴	<u>下旬?</u> 李斎と花影、垂州で別れる?	一章6節	黄昏 P.64	文州では雪融けの時期が穀雨前後。それよりも垂州は南だが、「春とは名ばかりの」が春の盛りの時期にも拘わらず、の意味であるとすればこの時期は概ね立夏以降となる。
				4月	夏	小満 13~15日 芒種 28~30日	立夏次候 蚯蚓出 立夏末候 王瓜生 小満初候 苦菜秀 小満次候 靡草死 小満末候 小暑至 芒種初候 螳螂生		一章1節	黄昏 P.20	「夏の初め」をいつ頃と考えるかによって、李斎の慶来訪時期は随分と変動する。小満はグレゴリオ暦では例年5月20日頃。「夏の初め」にはやや早いと考えた+後で泰麒搜索が本格化するの「夏の盛りごろ」とあり、そちらとの間の期間の辻褃を合わせるために、李斎の来訪を芒種の頃と考えた。
				5月	夏	夏至 13~15日	芒種次候 鵙始鳴 芒種末候 反舌無声 夏至初候 鹿角解 夏至次候 蜩始鳴 夏至末候 半夏生	<u>中旬?</u> 李斎、金波宮を来訪、倒れる <u>下旬?</u> 李斎、金波宮来訪から約半月後に面会可能となる。その翌日延王・延麒、慶を来訪	一章6節・ 二章1節・ 三章2節	黄昏 P.63 同P.80 同P.170	「十日近く」を「十日以上」と解釈した。
				6月	夏	小暑 1~3日 大暑 16~18日	小暑初候 温風至 小暑次候 蟋蟀居壁 小暑末候 鷹乃學習 大暑初候 腐草為螢 大暑次候 土潤溽暑 大暑末候 大雨時行	<u>上旬~中旬?</u> 陽子・六太連れ立って蓬山へ行く。陽子が金波宮に戻り氾王・氾麟と面会。その2日後、延王・延麒来訪 <u>中旬~下旬?</u> 麒麟達による泰麒搜索が開始する	四章3節・4節・ 五章 1節・4節・5節	黄昏 P.276 同P.279 同P.306 同P.337 同P.349	堯天から蓬山までは一昼夜(=1日)、その日は休んで翌日玉葉から話を聞き、直帰したか一泊した後帰ったと考えられる。ならば陽子の出発~帰還の期間は3~4日。陽子の金波宮への帰還から2日後に尚隆と六太が来訪。
				7月	秋	立秋 1~3日 処暑 16~18日	立秋初候 涼風至 立秋次候 白露降 立秋末候 寒蟬鳴 処暑初候 鷹乃祭鳥 処暑次候 天地始肅 処暑末候 禾乃登	<u>中旬?</u> 廉麟と什鉢、傲濫の気配を見付ける <u>下旬?</u> 廉麟が泰麒の気配を教室で見付ける。その次の日の早朝、陽子・李斎・六太が蓬山へ出発。4日後に蓬山へ到着。翌日に碧霞玄君と対話。	五章5節・ 六章3節	黄昏 P.359 同P.360 同P.385	『魔性の子』の作中経過時間は全部で22日(別表1)。麒麟たちの登場と思われるのは第二章末、経過日数で言うならば5日目の夜のこと。廉麟が教室の泰麒の気配に言及するのは第七章末、12日目の夜。美大志望の高三生徒が廉麟を目撃する前日に泰麒の気配を見つけたと考え、傲濫の気配は分かるが泰麒の足取りが掴めない状態だったのは6日程度か? また、そこから泰麒発見まで9日、泰麒帰還までに10日。下記の陽子・李斎・尚隆の堯天~蓬山の往復日数と完璧に一致する。陽子・李斎・六太の蓬山行きは往復8日+滞在日1~2日とする、計9~10日かかっている。
8月	秋	白露 1~3日 秋分 16~18日	白露初候 鴻雁来 白露次候 玄鳥帰 白露末候 羣鳥養羞 秋分初候 雷乃收声 秋分次候 蛩虫坏戸 秋分末候 水始涸	<u>上旬?</u> 陽子・李斎・六太、金波宮へ帰還。その日のうちに廉麟が泰麒を捕捉。翌日延王が呉剛の門を開く <u>上旬?</u> 泰麒を連れ、陽子・尚隆・李斎は蓬山へ <u>上旬?</u> 範主従帰国。数日後、廉麟帰国。またその翌日に尚隆帰国。 <u>中旬?</u> 泰麒、目を覚ます。同日金波宮に謀反の動きあり。	六章5節・ 七章1節	黄昏 P.397 同P.399 同P.420 同P.421	李斎が泰麒と共に蓬山へ向かった場合、李斎は飛燕を用いたと見るべきか? 日数は前回と同じであれば4日だが、穢瘁によって昏睡している泰麒を運ぶのに4日もかけることは可能か? とら・たまの内一頭に李斎が騎乗した、それだけ李斎が回復したと考えれば一昼夜で着けるという風にも考えられるか?				

元号	年	元号	年	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所 (新潮版)	備考						
赤染	3年	弘始	8年	9月	秋	寒露 4～6日 霜降 19～21日	寒露初候 鴻雁来賓 寒露次候 雀入大水為蛤 寒露末候 菊有黄華 霜降初候 豺乃祭獸 霜降次候 草木黃落 霜降末候 蟄虫咸俯	上旬？ 李斎・泰麒、慶を出る 上旬 李斎・泰麒、墨陽山を下る。項梁・去思と出会う。 下旬 泰麒・項梁、鴻基に到着する（別表2）。 同時期、李斎達も琳宇に到着。	黄昏 P.458 白銀④ 『戴史作書』 白銀① P.13	黄昏 P.458 白銀④ 『戴史作書』 白銀① P.13	堯天から垂州まで2～3日程度、そこから墨陽山は1日かからない程度と考えるのであれば、泰麒・李斎が慶を出発したのも9月に入ってからと考えるのが自然か。 白銀④の「戴史作書」には、泰麒が9月中に白圭宮に戻ったと書いてあり、また白銀①P.312の記述は李斎達が琳宇に到着する直前であること、碩杖～琳宇の日数と碩杖～鴻基の日数がほぼ同じであること、白銀①P.321に、李斎達の琳宇到着は東架出発から半月後とあることから、泰麒は9月下旬に鴻基に到着したと考える。 泰麒が待ちぼうけを食った日に見た月は夕食後の時間帯に昇っている月なので、満月～下弦の月の間と見るべきか（一般に、満月は日の入りと共に昇り、下弦の月は真夜中に昇る）。						
							10月	冬	立冬 4～6日 小雪 19～21日	立冬初候 水始氷 立冬次候 地始凍 立冬末候 雉入大水為蜃 小雪初候 虹藏不見 小雪次候 天氣上騰地氣下降 小雪末候 閉塞而成冬*	上旬？ 泰麒、阿選に呼び出される。李斎達、函養山へ向かう。 中旬～下旬 李斎達、静之に行き会う。	六章1節・ 七章1節・ 八章2節	白銀① P.312 白銀② P.81 同P.14	白銀①P.312～P.320に見られる文州の描写は全て新月の夜だが、泰麒が白圭宮で待ちぼうけを食った日の夜は月が出ている。P.312の描写は少し時間を先取りしたシーンであると読める。			
										11月	冬	大雪 4～6日 冬至 19～21日	大雪初候 鶡鴒不鳴 大雪次候 虎始交 大雪末候 荔挺出 冬至初候 蚯蚓結 冬至次候 麋角解 冬至末候 水泉動*	上旬 李斎達、函養山周辺の鉱山を探索して琳宇に戻る。この頃、基寮死亡。 中旬 李斎達、白琅へ到着。赴葆葉を訪問。 下旬 李斎達、老安を訪問。老安で死んだ者が驍宗であると伝えられる。	十章6節・ 十二章 1節・2節・ 十二章7節	白銀② P.287 同P.328 同P.343 同P.411	日数については別表2を参照。基寮が死亡した日の数日前を11月1日と考えた場合、李斎達の老安到着が11月30日過ぎであるため、李斎達の老安到着付近でちょうど月が改まる可能性あり。 白銀②P.283「姉が倒れたのは、つい先日、父親と連れ立って淵に供え物を流しに行った日のことだった」とあり、一家の長女が倒れたのが11月の新月の日であると分かる。この時、P.283「同時に冷気と風に撒かれた雪が家の中に吹き込んだ」とあり、これが基寮の墓に積もった雪、李斎達が琳宇に見た雪と同じものであると考えられる。
													12月	冬	小寒 4～6日 大寒 19～21日	小寒初候 雁北郷 小寒次候 鶡始巢 小寒末候 雉始雊 大寒初候 鶏始乳 大寒次候 鶯鳥厲疾	上旬 李斎、建中を介して石林観の沐雨に呼び出される。 下旬 李斎達のもとに、如翰が匿っていた女性が訪問。李斎達を見張っていた詳悉らから、牙門観の動静が判明する。
4年	9年 (興8)	1月	春	立春 7～9日 雨水 22～24日	大寒末候 水沢腹堅 立春初候 東風解凍 立春次候 蟄虫始振 立春末候 魚上氷 雨水初候 獺祭魚 雨水次候 鴻雁来	上旬 詳悉が李斎を再度訪問。赴葆葉との面会の言伝を持ってくる。阿選、朝議に姿を現わす。阿選は驍宗を養う筈だったと回想する。 中旬 李斎達、修行道を通って高卓へと至る。高卓で霜元と再会、話し合う中で阿選の真意に気付く。 下旬～翌月 西崔・龍溪に高卓や白琅から多くの人が流入。鄴都の発案で墨幟の幡を作る。										十六章 4節・6節・ 十七章4節・ 十九章4節	白銀③ P.239 同P.264 同P.322 同P.300 同P.307 白銀④ P.41



元号	年	元号	年	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所 (新潮版)	備考
赤 楽	4年	弘 始	9年 (開8)	2月	春	啓蟄 7~9日 春分 22~24日	雨水未候 草木萌動 啓蟄初候 桃始華 啓蟄次候 倉庚鳴 啓蟄末候 鷹化為鳩 春分初候 玄鳥至 春分次候 雷乃発声	<u>上旬~中旬</u> 土遜、泰麒を謀殺しようとする。これが原因で、土遜・張運は失脚。 <u>下旬</u> 友尚、阿選に呼び出され文州への進軍を命じられる。恵棟、阿選を主公と仰げないと泰麒に語る。	二十章2節・ 『戴史乍書』	白銀④ 『戴史乍書』 白銀④ P.73	
				3月	春	清明 7~9日 穀雨 22~24日	春分末候 始雷 清明初候 桐始華 清明次候 田鼠化為鴽 清明末候 虹始見 穀雨初候 萍始生 穀雨次候 鳴鳩抃其羽	<u>上旬</u> 牙門親経由で、鴻基から軍が来るという情報が李斎達にもたらされる。 <u>中旬</u> 友尚、琳宇に到着、土匪の掃討を開始。李斎達、土匪に加勢する。 <u>下旬</u> 李斎ら、友尚軍に勝利し、また驍宗を保護。驍宗、李斎、去思、鄧都らは馬州へ向かう。	十九章6節 二十章1節	白銀④ 『戴史乍書』 白銀④ P.48 同P.62 同P.79 同P.90 同P.153 同P.143	白銀③P.359「ともかくも友尚は琳宇へ向かうことになった。部下を選抜し、一師を編成し、琳宇に到着するまでに約半月というところか」とあり、また白銀①P.144「雪の街道を進むこと半月、英章軍は文州琳宇に到着、その郊外に陣を構えた」と見え、準備を含めれば半月強が経過すると読めるため、友尚の琳宇到着を中旬とした。 禁軍と土匪が戦闘状態に入ったという報が李斎達に齎されたのが満月以降、すなわちその月の16~18日頃。 驍宗の捕縛の日がちょうど月の変わり目の可能性がある(別表2参照)。
				4月	夏	立夏 10~12日 小満 25~27日	穀雨末候 戴勝降于桑 立夏初候 蜩鳴鳴 立夏次候 蚯蚓出 立夏末候 王瓜生 小満初候 苦菜秀*	<u>上旬</u> 阿選、驍宗の足取りをつかみ、魂魄を抜いた婦泉を派遣。驍宗、馬州州境付近で捕縛される。鄧都死亡。文州師、驍宗護送の警備に当たる。 <u>中旬</u> 文州師、白琅を通過。霜元ら、軍勢を糾合する。 <u>下旬</u> 元汲東で文州師と墨幟、衝突。驍宗、琳宇の王師に引き渡される。墨幟の驍宗奪還ならず、潰走。	二十二章3節・ 二十二章5節・ 『戴史乍書』	白銀④ 『戴史乍書』 同P.278 同P.280 同P.292	
				5月	夏	芒種 10~12日 夏至 25~27日	小満次候 靡草死 小満末候 小暑至 芒種初候 螳螂生 芒種次候 鵙始鳴 芒種末候 反舌無声 夏至初候 鹿角解 夏至次候 蜩始鳴*	<u>上旬</u> 浩歌と光祐、それぞれ英章・臥信軍に合流。また、去思を保護。阿選、一月後に驍宗の公開弾劾を行うと発表。 <u>中旬</u> 李斎ら、鴻基へ向けて、三々五々文州を出発。 <u>下旬</u> 臥信が江州城を陥落させる。	二十四章 1節・4節・ 二十五章1節	白銀④ P.397 同P.361 同P.413	
				6月	夏	小暑 10~12日 大暑 25~27日	夏至末候 半夏生 小暑初候 温風至 小暑次候 蟋蟀居壁 小暑末候 鷹乃學習 大暑初候 腐草為螢	<u>上旬</u> 墨幟の驍宗・泰麒の奪還、成功。墨幟、鴻基から江州城へと後退。 <u>中旬</u> 漕州城に王旗、麒麟旗が揚がる。泰麒、蓬山へ。友尚ら墨幟の最後尾、江州に到着。	二十四章4節・ 『戴史乍書』	白銀④ P.403 同P.404	『戴史乍書』の「朝を調う」が王旗・麒麟旗の掲揚の日を指しているという考えもあるが、この時点では泰麒は蓬山におり、実際に「朝を調う」状態ではないため、泰麒の帰国や鴻基からの完全撤退が完了し、政治機構が驍宗の下で整った状態になることが「朝を調う」の指している意味であると考えた。
				7月	秋	立秋 13~15日 処暑 28~30日	大暑次候 土潤溽暑 大暑末候 大雨時行 立秋初候 涼風至 立秋次候 白露降 立秋末候 寒蟬鳴 処暑初候 鷹乃祭鳥		『戴史乍書』	白銀④ 『戴史乍書』	



元号	年	元号	年	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所 (新潮版)	備考		
赤 楽	4年	弘 始	9年 (四〇)	8月	秋	白露 13~15日	処暑次候 天地始肅 処暑末候 禾乃登 白露初候 鴻雁来 白露次候 玄鳥帰 白露末候 羣鳥養羞 秋分初候 雷乃収声						
						間	8月	秋	寒露 16日	秋分次候 蟄虫坏戸 秋分末候 水始涸 寒露初候 鴻雁来賓 寒露次候 雀入大水為蛤 寒露末候 菊有黄華			
									9月	秋	霜降 1日	霜降初候 豺乃祭獸 霜降次候 草木黄落 霜降末候 蟄虫咸俯 立冬初候 水始冰 立冬次候 地始凍 立冬末候 雉入大水為蜃	
				10月	冬	小雪 1~3日	小雪初候 虹藏不見 小雪次候 天氣上騰地氣下降	驍宗ら、鴻基を奪還。阿選を討ち取り、明織に改元。			白銀④ 『戴史乍書』		
						大雪 16~18日	小雪末候 閉塞而成冬 大雪初候 鶡鴒不鳴 大雪次候 虎始交 大雪末候 荔挺出						
				11月	冬	冬至 2~4日	冬至初候 蚯蚓結 冬至次候 麋角解 冬至末候 水泉動						
						小寒 17~19日	小寒初候 雁北郷 小寒次候 鶡始巢 小寒末候 雉始雊						
							12月	冬	大寒 4~6日	大寒初候 鶡始乳 大寒次候 鶯鳥厲疾 大寒末候 水沢腹堅			
				立春 19~21日	立春初候 東風解凍 立春次候 蟄虫始振 立春末候 魚上氷*								

#### タイトルの表記について

- ・風海……小野不由美『風の海 迷宮の岸』2016年・新潮社
- ・黄昏……小野不由美『黄昏の岸 暁の天』2018年・新潮社
- ・華胥……小野不由美『華胥の幽夢』2018年・新潮社
- ・白銀①~④……小野不由美『白銀の墟 玄の月』第一巻~第四巻 2019年・新潮社

#### 暦についての補足

- ・1章=19年。章法はメトン周期に基づき、19年に7回置閏する。新章の開始は必ず朔旦冬至となる。
- ・大小月（30日の月と29日の月）が分からないことから、日に幅を持たせながら半年を目処に二十四節気の配当をずらしている。  
なお、置閏直後から節気が前の月に先行して出現するが誤りではない（年内立春など）。
- ・\*が付いているものは、月の大小等の関係で、前後の月に候が移動する可能性のあるものを指す。
- ・上旬：1~10日、中旬：11~20日、下旬：21日~29/30日
- ・後漢四分暦では1年の日数を365.25日とし、1ヶ月の日数を29+499/940=29.53085日としていた。  
365.25×19=6939.75=235×(29+499/940) となり、235=12×19+7から、12ヶ月を19回繰り返す中に（則ち19年の中に）7回の閏月を加える（13ヶ月の年を7回設ける）ことで、  
太陰太陽暦に生じるズレを解消できる。
- 置閏の頻度については、6939.75÷7=991.4日であることから、991.4日に1回の置閏を行えば良いことになる。991.4日は概数にして2年8ヶ月24日程度。  
ここから、32ヶ月~34ヶ月に1度の置閏を行えば良いことになる（国立天文台のHPによれば33~34ヶ月に1回の置閏で良いとのことだが、諸々の便宜上……）。



# 戴国カレンダー

## 本表

### 別表1 『魔性の子』時系列

### 別表2 『白銀の墟 玄の月』時系列

作成者: ほしなみ (<http://seisatoka.lomo.jp>)

表デザイン・編集協力: しぐま

作成日: 2021年9月11日

表紙・裏表紙はてんぱるさまの素材をお借りしました。

てんぱるさま pixiv: <https://www.pixiv.net/users/2513282>

この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。原作者さまや出版社さまとは一切関係ございません。